

倭寇

大森 海太

先般、早稲田大学で岡本隆司という先生による「倭寇」についての公開講座を受講した（八回もの）。

この先生は京都出身、関西弁まるだしで「ほなボチボチやりまっか」と始まり、講義もなにやら論旨不明瞭なのだが、それでも内容がじわっと頭に入ってくるみたいでそれなりに面白かった。

ユーラシア大陸で今の中国にあたる一帯は、古来農耕民族と騎馬遊牧民族の抗争により様々の王朝が興亡を繰り返したが、十三世紀モンゴルが東西を征してシルクロードを抑え、交易が活況を呈し「アジア史の集大成」を迎えた。

ところが十四世紀、寒冷化と疫病により元朝が崩壊し、代わって登場した明朝はアンチモンゴルで外夷を排して漢人王朝を唱え、反商業、海禁政策により農本主義復帰をめざしが、十五世紀後半になるとほころびが生じる。

北からはいったん退いたモンゴルが侵入し、南の沿岸地方では地域住民のほか日系商人やポルトガル人などによる違法貿易が盛んに行われた（北慮南倭）。

福建の海賊と平戸の日本人女性との間に生まれ、明末から清初期に活躍した鄭成功もその一例で、これらは「後期倭寇」といわれ十三、四世紀の日本人海賊（前期倭寇）とは区別される。

続く清朝は明朝路線を引き継いだが、その支配力は弱く末端までは及ばなかった。

いっぽう十八世紀後半から各地で人口爆発が起こり、政府の統制が届かない沿岸地域では外国商人との闇取引が蔓延、なかにはアヘン戦争の発端となった英国商による密貿易の手先となる者もあった。

これらは後期倭寇の流れといわれる。

さて時代は変わって現在の共産党政権。

ことに最近は政府批判への締めつけが厳しく、党の指導方針に全面的に従うことが求められているが、これは現政権支配の及びにくい地域や住民への懸念が募っていることへの裏返しとも見られる。

岡本先生は明末の各地における叛乱や、清末の白蓮教徒、義和団などの例をあげ、「これも広い意味での倭寇、歴史は繰り返しますからなあ」と言われる。